

Title	アルジェリアを尋ねて：カミュの「異邦人」の背景
Sub Title	Voyage en Algérie
Author	片桐, 邦郎(Katagiri, Kunio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.2- 12
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0002

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アルジェリアを尋ねて

——カミュの「異邦人」の背景——

片 桐 邦 郎

はじめに、この論文集の性格上、白井浩司先生に対して、私事ではあるが、感謝の意をあらわす文から始めることをお許しいただきたい。

私が慶応義塾の予科に入学して、最初にフランス語を教わったのは、白井先生であった。英文科に進むはずのこのクラスには、亡くなった山川方夫も居て、予科二年から、新制大学に変わった折、二人で仏文科に移った。

それ以来、今日まで三十余年になる。私は、大学、大学院でアルベール・カミュを論文としていた関係で、この方面でもいろいろと先生に御指導いただいた。特に、一九七四年に、私はアルジェリアを中心として、カミュの生い立った地中海沿岸を巡り歩く目的で留学した時、その前年にアルジェリアに行かれた先生から、数々の御助言やら資料をみせていただいたりした。また、帰国後、七五年五月の「ユリイカ」カミュ特集に小文を出す機会をえるなど、先生の御指導、御助言は感謝にたえない。当時、先生は、アルジェリアに関する資料を探している——と仰言っていたが、HAY CHETTE の Guide bleu のアルジェリアも出ていなかったし、MICHELIN のアルジェリアの地図は七二年に出たものの、パリではほとんど入手困難な状態であった。案内書でさえそうであるから、まして、アルジェリアの歴史の書などは全くないと云ってよい位であり、また独立後のアルジェリアは、地名や街、通りの名前まで、フランス名をアラブ

名に変えていたので、アルジェリアに渡られた先生の御苦労は大変だったと思う。先生の御助言のおかげで、私は何とか巡り歩くことが出来たが、私がアルジェの日本大使館に行き、アルジェリアの地方の状況を伺った時、逆に、どんな資料をお持ちですかと尋ねられた。当時、私はやっと手に入れたミシュランの地図と、出版されたばかりのNAGELのアルジェリアと……と云いかけたところ、それだけお持ちなら、もう何もいうことはありません——と云われたものである。

当時、わが国で流行した歌謡曲の歌詞で、「……こゝは地の果てアルジェリア……」というのが流行していた。このような文中に流行歌を引用するのは不謹慎だろうか？ 同じ頃の新聞に、アルジェリアの石油採掘の写真とともに、「アルジェリア」は、国をあげて近代国家づくりを推進しており、断じて「地の果て」ではない——という主旨の報道記事が出ていたのを覚えている。

煙草をのまない私が、アルジェで煙草を買った。煙草の名前が「マグレヴ」MAGHREB だったからである。マグレヴとは、モロッコ、アルジェリア、チュニジアの北アフリカのアラブ三国の総称であり、東の方のアラブ諸国家（マチュリク）に対して、「西の果て」という意味である。ところで、この三つの国を一括してマグレヴと呼ぶことは、今日では不当と思われる。これら三ヶ国を巡ってわかったことだが、モロッコとチュニジアは、燐鉱石の産出国だが石油資源はなく、もっぱら観光立国である。それに反して、アルジェリアは、マグレヴ唯一の産油国であり、近代化の途上であって、観光は二の次であった。たとえば、当時（七四年）エア・フランスのヴァカンスのパンフレットでは、マグレヴの観光ツアーは、チュニジアが十二、モロッコが八つあるが、アルジェリアは「オアシス巡り」一つであった。こう

したパンフレット一つでも、フランス人がヴァカンスにどの方面に行くか——とか、また、それら国々の状況、受け入れ態勢がわかって興味深いものである。パリで手に入れた別のパンフレットの中で、GRAND MAGHREB という二十一日のツアーでは、モロッコからアルジェリアを横断してチュニジアに行く途中、アンナバ ANNABA(昔は BONE)からチュニスへのバスが、ドレアン DREAN(昔の MONDOVI) 経由となっており、カミュの生まれたモンドヴィが、現在はドレアンと呼ばれていることを知った。(この地を訪れたことは後述する)。

アルジェリアが地の果てか、果てでないかは、見る者の視点によって異なるだろう。カミュの「異邦人」が、わが国に紹介された頃、(一九五一年)日本人の北アフリカ観は、映画の「望郷」や「外人部隊」が一般的であったろう。

「ペペ・ル・モコ」というフランス映画に「望郷」という日本題をつけたのは、「パリ祭」以上に日本的である。「望郷」から約三十年たって、日本で上映された「アルジェの戦い」では、食いつめたお尋ね者の隠れ場所であったカスバは、まさに、その言葉通りの「砦」となってスクリーンに写し出されている。この二つの映画の間に三十余年の年月があるとはいえ、われわれ日本人のアルジェリア観はこの両極端の間をゆれ動いている。カミュが知ったら、これこそ absurde というだろう。

カミュの「異邦人」が、日本で紹介された一九五一年から五二年にかけて、わが国で、中村光夫氏と広津和郎氏との間で行われた「異邦人」論争については、多くの議論を生み、また私も以前に述べたこともあるので、こゝではくり返さない。この論争が誤訳にもその一因があることを指摘された方もあり(広津氏は翻譯でしか読んでいない)、誤訳がいくつもの誤解を生んだことも事実である。しかしながら、この作品の理解に際して、われわれがアルジェリアを知らないすぎたことも事実であろう。「異邦人」に関していうならば、この作品の作家が育まれた土地であり、その作品の舞台

でもあるアルジェリアに対して、読者は知らなすぎ、誤解したままでいる。

「異邦人」の第一部の太陽による殺人の場面の強烈さから、われわれはアルジェリアという太陽の国という印象が強い。しかし、たとえばアルジェの町は、北緯でいうと東京より北であり、一月の平均気温は十一度くらいで、八月は二十六度位。湿度も六十七十度位が多く、温和な気候である。アルジェから二時間も車に乗るとスキー場でもあり、冬の二、三月はスキーも出来る。以前に指摘したが、ジェミラの遺跡の近くで入手した小解説誌には、雪景色の写真が数葉入っていた。不条理な感覚を生むアルジェリアの風土を、太陽の国で理解しようとするのは早計であり、片手落ちである。

他の例について考えよう。「異邦人」の中で、アラブ人が黙って物陰からみつめている場面がいくつか書かれている。この小説のあちらこちで描かれているこの沈黙の視線こそは、実存主義でいう「他者の眼」である——と、読んでいた時は、こう解釈していた。アルジェの町に行つて驚いたものである。「他者の眼」だらけであった。独立後、各地から首都に來た人々は、仕事をするでもなく道端に腰をおろして、外国人とみるとじつと見つめているのだ。カミュが「異邦人」を執筆してから三十余年すぎ、独立した今日でも、この瞳は変わらない。とすれば、アラブ人本来の視線か、それとも長期にわたつた過去の歴史の結果だろうか？ 哲学的(?) 解釈よりは、歴史のあるいは民族的に考察した方が妥当かもしれない。何れにせよ、「オダリスク」や「アルジェの女」を描いたフランス人の画家たちのような異国趣味でなく、アルジェリア生まれのカミュは、アルジェリアやアラブ人に対して、好奇の瞳でなく好意の瞳を持っていたにちがいないが、そのカミュもアラブ人の視線に「他者の眼」を意識したのであるか。

地方を旅行した時もそうだが、首都アルジェを歩いて、三十年、四十年前はどうだったのだろうか、常にくり返し

ながら、私はアルジェリアを旅行したものである。

私がドレアン（モンドヴィ）を訪れたのは、カミュが生まれてから約六十年後であった。六十年前のこの町の様子は想像出来ないが、アンナビ（ボーン）から三十キロほどのこの町は、今日ではブドウの集散地として街道沿いの町の入口には、いく棟もの倉庫が建ち並び、南フランスの片田舎の小村にでも行ったような感じがした。南北に通る道路にクロスしたメイン・ストリートは、今日、カミュ通り「RUE A. CAMUS」とプレートに書かれていた。このカミュ通りは並木通りで、歩道と車道にわかれており、意外に広い道であった。私は、南仏のルールマランのカミュの晩年の家を思い出していた。あの家の前の通りもカミュ通り「RUE ALBERT CAMUS」と名づけられていたが、それよりはるかに長く、幅広い通りであった。窓や扉は枯ちてはいても、六十年前の姿を想像すると、この町が、アルジェリア独立戦争の勃発の地であるコンスタンチヌと同じ東部にありながら、その影響も少なく、田舎の村としての面影をとどめているのは幸といふべきだろう。アルジェの市内なら当然なくなったであろうカミュ通りの名は、チバザの遺跡の丘の上に残るカミュの名入りのモニュマン（婚礼の一文が刻まれている）を目にした時と同様に嬉しかった。

カミュの生家を前に、私は、ルールマランの町はずれの墓地のカミュの墓を思い出して、表面に ALBERT CAMUS 1913-1960 と書かれてあるだけの墓石は、だれが植えたのか墓石の左右と後方を、側面や後方からは墓石が隠れるほどロマランが生い茂っていた。香料にもなるロマランの馥郁たる香りにつつまれたカミュの墓を思い浮かべながら、カミュの生まれた片田舎の町の静寂を私は味わっていた。「貧困は豪奢だった」——カミュの言葉がふと思い出された。

カミュが思想の形成期にこの貧しくて豊かな風土の影響とは別に、結核による死の影が、彼の思想に影響を与えたこ

とは衆知のことである。六十年前のこの町の衛生環境がどうであったかはわからない。しかし、コンスタンチヌに帰った時、郵便局で買った切手の中に B.C.C. 接種の結核予防をキャンペーンする切手があった。アルジェリア東部は、現在でも結核予防の努力が行われているようであった。地方の衛生状態に関していえば、私が、コンスタンチヌから二百余キロはなれたジェミラを訪れた時のことである。昼食時をはるかに過ぎた時間でもあり、私は案内してくれた運転手のアルジェリア人に、近くにレストランを探してくれ、昼食をごちそうしよう、と云ったのだが、彼は、コンスタンチヌに帰ってから食事をするからと断わった。瓶入りジュースも、コップにあげずに飲んでいる彼の様子から、飲食物からの病気を恐れていることがわかった。

アルジェリアを旅行して、海岸より内陸の都市や、一部の沿岸の町（たとえばチバザ）をのぞいては、一八三〇年以後、フランスがアルジェリアを植民地化し始めてからのヨーロッパ式の都市が多い。たとえば、首都のアルジェは、十九世紀にその支配者であるフランス人が、自分達が住み、自分達の威光を示すために建築した町であった。ヨーロッパ人と現地人との住宅区は分れており、この町を歩くと、且て、北アフリカを侵略したフェニキヤ、カルタゴ、ローマ、が自分達に適した、自分達のための街づくりをした後に、フランス人が入って来た——という感を深くする。

チバザやジェミラだけでなく、アルジェリアには無数のローマの遺跡がある。別図にあるように、それらは地域によって、時代によって異なっているが、たとえばアルジェリアの TIMGAD の遺跡は、モロッコの、FES、チュニアの DOUGGA と並んで大規模なものである。チュニアの KAIRUAN にある闘技場は、ローマのコロシウムと比較されるほど大きく、また完全な姿で残っている。南仏のニームやアルルのとは比較にならないほど大きい。カミュが生きていた時代に、これらの遺跡が、今日ほど調査されていたとは思えないが、たとえば、ジェミラの遺跡は、フランス統

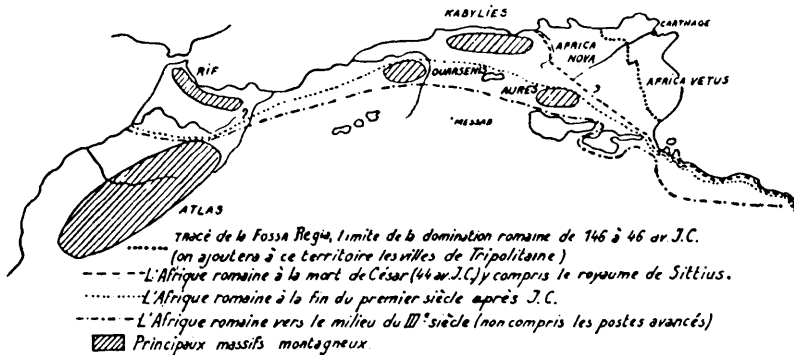


FIG. 11. — L'expansion romaine.

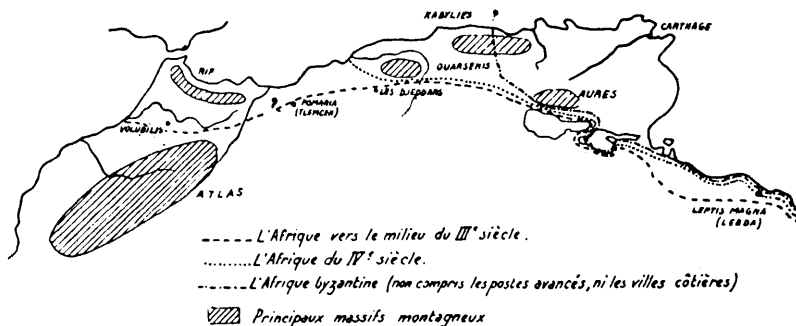


FIG. 12. — Les reculs de la puissance romaine.

治時代に発掘調査されており、遺跡の入口近くにある建物は、私が訪れた頃（七四年）は博物館（と云っても、誰も来訪者はいなかった）になっており、この教室の建物は、フランス調査隊が設置したものであった。

カミュが、アルジェリア時代、その遺跡を数多く巡り歩いたとは思えない。しかし、カミュが訪れたアルジェ西方約七十キロにあるチパザは、五十年前とはいえ、当時のフランス人なら訪れることは困難でなく、また、その途中にある LE MAUSOLEE ROYAL DE MAURETANIE は、俗称を TOMBEAU DE LA CHRETIENNE と云って、この名前での揭示は、アルジェからチパザに行く左手にあり、また、この小ピラミット型をした墓は、街道からよく見える丘の上にあるから、恐らく、カミュも立ち寄ったにちがいない。

俗称をキリスト教徒の墓と云っているが、それは入口の石の扉に彫られた十字架に似た模様からくるのであり、モウレタリア（アルジェリア西部にあったローマの属州）の王の墓であったことは間違いない。私は、この内部に入ってみたが、その構造は、メドラセン、(MEDRACEN'、コンスタンチヌ南方、TIMGAD の遺跡に行く途中のモニユメント) の遺跡と似ていた。メドラセンのも円形小ピラミッド型で、こちらはヌミディア（アルジェリア東部のローマ属州）の王の墓であろうが、内部の造りまで似ていた。

私が、カミュから出発して、アルジェリア独立以前の、カミュが生活し、見たり聞いたり、肌で感じたアルジェリアの自然だけでなく、さらに歴史的な過去にまでさかのぼって歩いたのは、カミュの思想に、宗教に、その生い立ちの風土が如何に影響を与えていたかを、自分で確かめたからである。この地で、あまりにも多くある遺跡や文化、フェニキヤからカルタゴ、ローマ、さらには現住民の文化のあるにもかゝらず、カミュが、アルジェリアには歴史がない——と云っているのは何故だろうか？ これらの遺跡や文化は、カミュにとっては歴史ではなかったのだ。彼の考え

ている地中海文化とは何か？今日のアルジェリアを歩いて、恐らく、アルジェリア人にとっても、カミュは「異邦人」だったとの感を深くした。

カミュの作品と思想は、フランス本国とは別のアルジェリアで花咲いたものであり、日本人にとっては、フランス本国で生まれた文学や作品とは、また異った異質の文学である。しかも、彼が活躍していた当時とは、今日は、あまりにも変貌しているアルジェリアを眼の前にして、その文学や思想を理解するために、どうしたらよいのか、私は行む思いである。

この小文の終りを、地中海沿岸を廻って感じた「オリーブ」と「こうのとりの話で閉ぢさせていただくことにする。

ヨーロッパを北から南に下ると、ぶどう畠とは別に、オリーブの林をみることが多い。実際に、ヨーロッパの生活で、バターやチーズは北方であり、南にいくとオリーブ油がそれにかわって登場する。ニス風サラダなどは、まさにオリーブ油である。オリーブの木は土地が乾燥し、肥えていなくても育つが、よい実が成るのは、植えてから三十年以上たかねばならない。地中海沿岸の国々で、三十年以上たつたと思われるオリーブの林が山や丘を覆っていたのは、スペインであった。

私は、スペインで、パルマ、イビサとマジヨリカの諸島を歩いた。イビサ島は、カミュが、生に対する愛を感じた島である。丘の上の水車が、微風でまわっている——という文を思い出し、丘に登ったが、オリーブの木が何本もあるような小高い丘であった。オリーブの木のあるところには、あまり水はない。水車は MOULIN だけで、風車であった。風車や、水車は、アラブ民族の発明によるようで、水を使う水車はリビアにはあるが、地中海沿岸や、ヨーロッパ内部は風車が主である。

また、私が、パリからポルドー経由でマドリッドに行く途中のことである。隣りのフランス人の老婆が、ポルドーの娘の嫁ぎ先に行くとかで話し始めたのだが、ストラスヴールに住んでいるとのことであった。ストラスヴールは、このとりで有名だが、私はそこでは一羽も見なかった。ストラスヴールにこのとりはいますか、と尋ねると、いないとのことだった。ヨーロッパの文学の、あるいはメルヘンに出てくるこのとりは、ヨーロッパではあまり見かけない。この疑問が解決したのは、ルールマランであった。カミュの墓地のあるこの小さい町で、私は、たまたま声をかけた老人の家に迎えられ、お茶をごちそうになった。その折、ピカソの画にあるような白い孔雀鳩のいる庭園を案内されている時、この疑問を思い出し、尋ねてみた。「農業を使うからだ。農業によって、このとりのえさの虫がいなくなったからだ。」と。科学はメルヘンを駆逐したのである。

その後、注意してみると、スペインで、このとりの巣をいくつか見つけた。北アフリカに渡り、モロッコでは、タンジェからカサブランカの地方のバスの中で沿道に、巣をみつけた。アルジェリアに入って、アルジェ近郊ではわすれていたが、アンナバからドレアン（昔のモンドヴィ）に行く道路に沿った電柱の上に、多くのこのとりの巣をみつけた。思わず、このとりの巣が多いね——と運転手に声をかけたところ、さっきのカミュの家にも巣があったじゃないか——と答えがかえってきた。少しばかり興奮していたので、そこまで気がつかなかったのだが、後日、チュニスに行つて写真を現像したところ、家の屋根にこのとりの巣が写っていた。

文学も文化も、自然も風土も、移り変って行く今日、作品の理解に、特に外国文学の場合に、思わぬ要因を無視すると、誤解を生むことになるだろう。このとりのいまだに住むアルジェリアから、このとりが姿を消すことのないことを祈って、この文を終わりたいと思う。

参
考

DES FRANÇAIS EN ALGERIE 1830-1914, M. BAROLI, HACHETTE

LE DERNIER JOUR DE L'ALGERIE FRANÇAISE G. ISRAEL, ROBERT LAFONT

HISTOIRE DE L'AFRIQUE DU NORD, C.-A. JULIEN, PAYOT (文中の地区はつたから転載した。)